序　文

アジア諸国の仏教文化を研究対象とする本プロジェクトの三つのユニットの間で、問題意識を共有するために全体研究会を10回開催した。主たるテーマは、昨年度同様に「エンゲイジド・ブディズム」である。

本年度は、「アジアで活躍する仏教指導者」という共通テーマのもとに、インドで布教活動を進めているブッダ会会長の中村行明師、タイのタンマガーイ寺院の教育部副部長テーシャタンモー師、そして、広島や福島で活躍している真宗学寮教授の岡本法治師をお招きして、それぞれの活動の実態と今後の抱負を話して頂いた。来年度は、このテーマで韓国と台湾の仏教指導者を招いて、お話しして頂く予定である。

また、あらたに「エンゲイジド・ブディズムの潮流」という共通テーマで、５人の講師をお招きした。東方研究会の田中公明氏には、インドのオリッサ地方の仏教徒の現状について発表して頂いた。マクマスター大学のマーク・ロウ准教授には、日本全国の諸宗派寺院の住職200余名に行ったインタビューから得られた現代日本仏教の直面している課題と未来への可能性について話して頂いた。明治大学の福田邦夫教授には、経済学の視点から日本において期待されるエンゲイジド・ブディズムの姿を語って頂いた。ブータン国の精神科医ドルジ氏には、同国のGNH政策と大震災後の日本について話して頂いた。最後に、上山大峻龍谷大学元学長をお招きして、仏教の直面する現代的課題についてお話し頂いた。

残り2回の全体研究会は、「近代日本仏教」をテーマとして、立正大学の安中尚志教授と駒澤大学の石井公成教授をお招きして、明治期の日本仏教が直面した諸問題や当時の仏教指導者たちの対応についてお話しして頂いた。本プロジェクトの最終的な目標は日本仏教の未来について積極的な提言をなすことであり、そのためにも今後は近現代日本仏教に関する最新の研究成果を吸収していきたいと思っている。

龍谷大学アジア仏教文化研究センター

センター長　桂紹隆